

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	グローバルスタンダードとヒポクラテスの誓い"
別タイトル	Global standard and The Hippocratic Oath"
作成者（著者）	坪井, 康次
公開者	東邦大学医学会
発行日	2014.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 61(1). p.1 2.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.61.1
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD35651512

グローバルスタンダードと“ヒポクラテスの誓い”

坪井 康次

東邦大学医学部心身医学講座教授

ある日、なぜか昔読んだクロニン（Cronin AJ, 1896-1981, 英）の『城砦』のことが頭に浮かんだ。おそらく中学か高校の時に読んだのだと思うが、しばらくは読んだことさえ忘れてしまっていた。

—— 医学校を出たばかりの青年医師アンドルー・マンズは、南ウェールズの炭坑地方へ医師の代診として赴任したのち、鉱山町に移って小学校教師のクリスティンと結婚し、貧しいながらも楽しい家庭生活に入る。肩書の必要を感じた彼は、妻の協力を得て猛勉強をした結果、英国医学会会員の資格試験に合格する。

その後、医師としての純粋な立場と、世俗的な成功との板ばさみになって悩みながらも、真理の探求に情熱を傾けて自分の道を切り開いていく医師の魂の成長を描いている。—— 常に患者のためにベストを追及する一方で、それを達成するための道具でもある、金銭的満足や、社会的地位の追及、そして家庭人としての在り方に、苦悩する。

この小説のことを、突如、思い出したのは、国も時代も違うはずなのに、現代の医療の現場にも当てはまるのが実に多いからかもしれない。今、改めて思い出してみると、アンドルーは、今でいうプロフェッショナルリズムに富んだ精神の持ち主であるが、その彼でさえ、金銭や社会的な地位などの誘惑に苦しみ、時には負けてしまう。医療におけるプロフェッショナルリズムの重要性と、その脆さ、危うさを見事に描いているように思う。

今、わが国の医学教育界は、Educational Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG) の2023年問題*を契機に、世界医学教育連盟（World Federation for Medical Education: WFME）によるグローバルスタンダードに準拠した医学教育制度の確立を急いでいる。2023年以降は、WFMEの国際水準をクリアしている医学部の卒業生しかECFMGの受験が認められないことになってしまう。そのため、まず認証を行うための機構として日本医学教育認証評価評議会（Japanese Accreditation Council for Medical Education: JACME）が2013年2月に立ち上げられ

た。これから順次、各医学部が受審し、認証を受けることになる。

WFMEは、2003年に最初のグローバルスタンダード（WFME Global Standards for Quality Improvement in Basic Medical Education）を発表し、2012年には改訂版（The 2012 Revision）を明らかにしている。このように国際的に医学教育のグローバルスタンダードが大きく取り上げられるようになった背景には、メディカルツーリズム（患者の国際間移動）やフィジシャンマイグレーション（医師の国際間移動）という国際社会情勢がある。

しかし、今ひとつ押さえておかなければならない要素に、2002年に米国内科学会など米国内科学会・米国内科専門医会・欧州内科学会の米欧内科3学会・組織合同が発表した「新ミレニアムにおける医のプロフェッショナルリズム」と冠した医師憲章がある。この医師憲章は医師の「社会的責任」を強調したもので、プロフェッショナルリズムのグローバルスタンダードとなる優れた憲章として、多数の国々に大きな反響をもたらした。WFMEのグローバルスタンダードとほぼ同時期である。偶然であろうか。

わが国において、医療に対する不信が叫ばれるようになってから久しい。これまでさまざまな対策がとられてきた。しかし、医療ミスが多発もあり、医療不信は軽減するどころか、近年さらに助長されつつあるかにみえる。この状況はわが国に限ったことではない。

医療職は、専門知識や技術の独占が許されている専門職であるがために、それらを悪用される危険は常にある。専門知識や技術の悪用はその分野の専門的な道徳によって制御されなければならない。社会はプロの道徳に対して非常に敏感である。

欧米諸国の医学界もこの「道徳面に対する信頼」を幾度も失いかけた歴史がある。米国の医学界では、1960年代、メディケアやメディケイドといった公的医療保険の台頭によって、米国医師は金銭的に保証されるようになった。次第に裕福になる医師たちを横目に、米国社会は「医師は患

者のためにではなく、お金儲けのために働いているのではないか」という疑問を抱くようになる。

こうした社会の医師に対する不信は、1999年の「To Err Is Human」(米国では年間9万8000人の患者が医療ミスによって死亡していると発表して、医療の安全性を社会問題に発展させた報告書)の発表によってさらに強固なものとなった。今世紀に入ってからも、躍進を続ける医科学と並行して、医師と製薬会社との利益相反(conflict of interest: COI)問題や、医学研究における患者の権利問題など、世界各国でさまざまな道德問題が後を絶たない。

いくら専門知識や技術を持ち合わせていても、それらを患者のために用いるという保障なくしては、何の役にも立たないばかりか、危険ですらある。iPS細胞の臨床応用が現実的となった今、悪用された場合の危険は計り知れない。それ故、英国、米国、カナダ、オーストラリアなどを中心に、医師の道德面については厳しく、医学生から専門医に到るまで、あらゆるレベルでの道德として、コンピテンシー

として、あるいは、アウトカムとして、“プロフェッショナルリズム”をあげている。

WFMEの国際水準の第1領域の最初にあげられているのは、医科大学・医学部の「使命と教育成果」であり、使命として「社会的責任」が、また、教育成果として、「医師として定められた役割を担う能力」があげられている。WFMEの主要な精神も“Patient Safety First”にある。“ヒポクラテスの誓い”の精神は、いつの世にも求められていることを常に認識している必要があるようである。

*医学教育分野における「2023年問題」

米国・カナダ以外の国の医学部出身者が米国で医師国家試験を受けるには、米国医師国家試験の受験資格を審査するEducational Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG)を受験し、合格しなければならない。医学教育分野における「2023年問題」とは、このECFMGが、2023年以降は国際的な認証を受けた医学部出身者以外の申請を認めないと通告した(2010年)ことを指す。